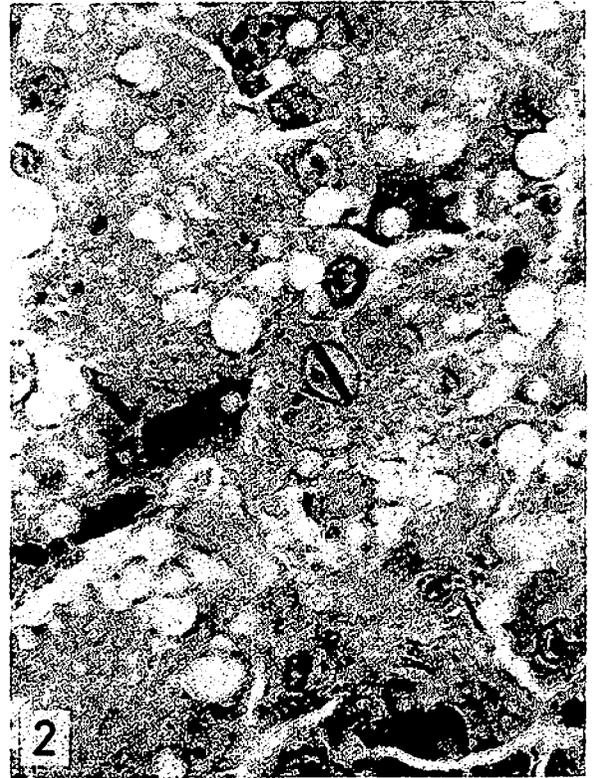
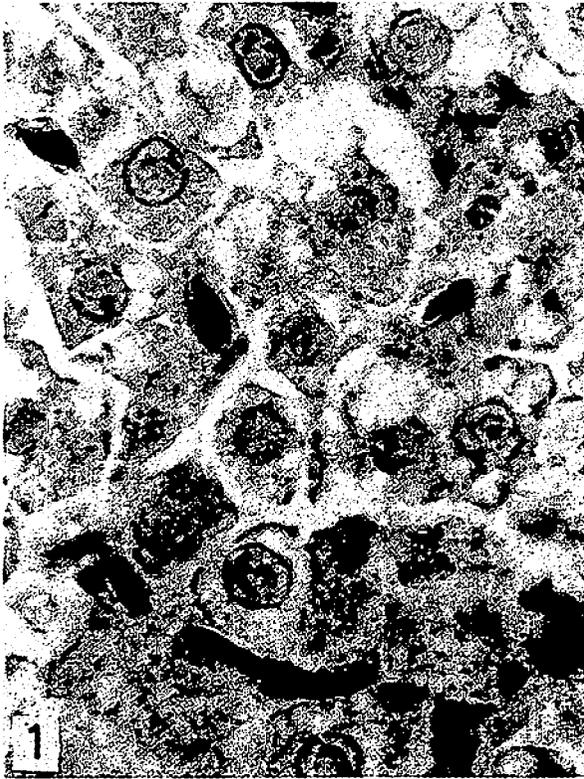


# 鶏の封入体肝炎

日本生物科学研究所出題 第14回獣医病理学研修会標本 No.215



鶏の核内封入体の出現によって特徴づけられる肝炎は1963年U. S. A. において報告され、1970年に封入体肝炎 (inclusion body hepatitis) という病名が与えられた。わが国においては1968年、故中松博士によってその第1例が報告されているが、最近、頻発の傾向があるようである。1973年2県から病性鑑定のため当研究所に届けられた5羽の鶏は、検索の結果本病と診断された。提出標本はその中の1例の肝である。病鶏は肉用種(ラミート)、雄、40日令で、認むべき症状を呈することなく急死した。

肉眼的に肝は腫大、脂肪肝様、脆弱で、粟粒大~米粒大の赤色斑が密在した。中等度の脾腫、消化管粘膜における赤色斑の散在、その他器官のうっ血が目された。

組織学的に肝は充血が著しく、粟状小出血が多発し、所々に単核小円形細胞の浸潤と輪状出血を伴う壊死巣がみられる。肝細胞は高度の脂肪変性に陥り、解離している。組織像に著しい特徴を与えるものは肝細胞核内における封入体で、大部分は好酸性、一部は好塩基性あるいは両色反応性に染まる。形態は種々であるが、封入体物質が核中央部に大集塊をつくり、染色質と核仁を核周に圧排し、明暈をめぐらす Cowdry の A 型封入体に属する

ものが大部分を占め、核全体を充たす封入体がこれにつぐ、両者の間には種々の移行型がある(図-1, ×400)。

肝細胞の核内には従来、鶏の封入体肝炎では記載のないもう一つ異種の構造が目された。この構造の大部分は柱状あるいは棍棒状、一部のもは球状、立方形等を呈し、エオジンに均質に好染するものが多い。核内に通常1個、時には2個以上含まれ、またしばしば上記封入体と共存した(図-2, ×400)。電子顕微鏡検索によれば本封入体は平行あるいは格子状に走る微小フィラメントからなり、最近、各種動物の種々の細胞において記載されている核内結晶封入体に一致する。この種の結晶封入体が検索5例の肝細胞核内に頻発したことは注目すべきことである。

本病の原因はアデノウイルスとされている。アデノウイルス感染細胞の核内にウイルス粒子の組立てに必要な核酸と蛋白が集積して封入体の形ちをとること、そしてその蛋白の15%程度がウイルス粒子に組みこまれ、残りの大部分は核内結晶封入体として残留することも明らかにされている。本例に認められた2種の核内封入体の成因と意義は、このことによって説明されるであろう。